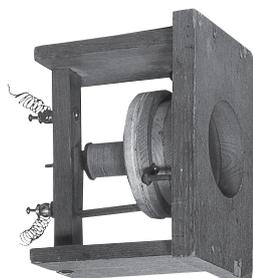


# 電話機のおゆみ

ベル電話機

1876



1876年(明治9年)

1837年、ペイジ(米)は、磁力が鉄片をひきつけ、音を発する「流電音(ペイジ音)」を発見、また、1861年、フィリップ・ライス(独)は、いかなる音も電気的に伝送・再生することができることを証明、その自作装置に「テレフォネ」と名づけ、電話の理論を発表した。

しかし、対話できる実用的な電話機は、1876年、アレキサンダー・グラハム・ベル(米)によって発明され、写真は、その原形である。わが国に電話機が渡来したのは、ベルの発明からわずか1年後の1877年(明治10年)である。

当時、横浜にあったバザリア商会によって、商品化されていた2個の電話機が輸入されたといわれている。音声による振動板の振動に伴って空気の圧力が変化し、永久磁石と巻線が構成する磁力線に変化を与えることにより音を電流に変え、また、到着した電流の変化による巻線と永久磁石の磁力線の強弱によって振動板を振動させ、音を再生する。

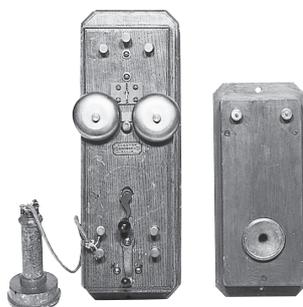
## 特徴

送話器・受話器が同形である。電池を使用しないので、微かな音しか発生せず、数十メートルの近距離にしか通話できない。

(注)送話器は、その後種々の改良が試みられたが、受話器は、この原理が現在でも使われている。

国産1号電話機

1878



1878年(明治11年)

輸入されたベルの電話機は、さっそく工部省で通話実験された。一方、電信局製機所では、この電話機をもとに模造を企て、明治11年6月、2台の電話機を完成させた。これが、わが国最初の国産電話機となった。

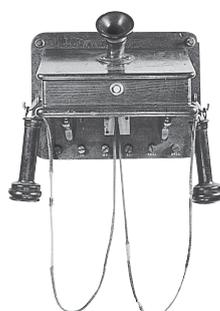
このあと、同一のものを約5年間に41台製作したが、音声微弱等の理由で明治16年に製作を中止した。その後、20年頃までの間、エジソンの炭素電話機、アーデル電話機等の模造を行っている。

## 特徴

送話器が永久磁石を中心とした構成で、電池を使用していないため、受話がどうしても微弱となる欠点を持っている。

ガワーベル電話機

1890



1890年(明治23年)

明治20年、イギリスからガワーベル電話機が輸入され、創業前の電話機選定試用に終止符が打たれた。

明治22年、東京-熱海間で行われた長距離通話実験(初の一般公衆通話となる)に使用され好結果を示し、翌23年12月16日の電話創業時に採用され、わが国最初の実用機として29年までの6年にわたり活躍した。

1879年、ガワー(英)が発明した送話器とベル電話機を組み合わせて作られたので、ガワーベル電話機と呼ばれた。

## 特徴

ガワー送話器は、音声に敏感に応じる炭素棒を使用し、かつ通話回路と炭素棒との接点を多くして安定度を高めている。

電話局の呼び出しはボタンを押し、ダニエル電池10個による直流電流を送る。局からの呼び出しは継電器と羽子板電鈴で受ける。

デルビル磁石式壁掛電話機

1896



1896年(明治29年)

明治29年7月、これまでのガワーベル電話機にかわり、より高感度のデルビル送話器を用いたデルビル磁石式電話機が採用された。

このデルビル電話機は、その後、共電式・自動式と並行して小規模局で昭和40年頃まで約70年間使用された。

一般に「磁石式電話機」という名称が固定して使われるようになったのは、磁石式発電機を持つこの電話機以後で、以前のものは単にガワーベル電話機、エジソン電話機等と呼ばれた。

## 特徴

ガワー送話器に用いられていた炭素棒を炭素粒にかえ、接点をさらに増して感度を高くするとともに、送話回路に誘導線輪を挿入して通話電流を大きくした。

電話局の呼び出しは、電話機内部の磁石発電機を回し、電流を送る。また、局からの呼び出しも初めは手回し発電機、後に交流発電機によってベルを鳴らした。

## 電話料金

|      | 1890年                              | 1892年                 | 1897年  | 1899年                                |
|------|------------------------------------|-----------------------|--|--------------------------------------|
|      | 電話創業                               |                       |  | 長距離市外通話開始                            |
| 市内通話 | 東京<br>年額使用料 40円<br>横浜<br>年額使用料 35円 | 全国均一定額料金<br>年額使用料 35円 | 都市によって異なる電話使用料金(3種類)となる<br>例) 東京、大阪で<br>年額使用料 66円<br>京都、横浜、名古屋、神戸で<br>年額使用料 54円<br>その他 年額使用料 48円 |                                      |
| 市外   | 東京~横浜間通話料<br>(5分) 15銭              |                       | 東京~横浜間通話料<br>(5分) 20銭  | 東京~大阪間で長距離市外通話が始まる<br>通話料金(5分) 1円60銭 |

**デルビル磁石式  
甲号卓上電話機**

1897


**1897年(明治30年)**

明治30年12月、初めての卓上形電話機としてデルビル磁石式甲号、乙号の2種が登場した。

当時、電話機の発達にエポックを画したものといわれ、電話の実用価値を増すと同時に装飾品としても役立つようデザイン面にも細かい注意が払われている。

なお、付加使用料年額6円を要した。

甲号電話機には、当初のものと大正5年から登場した四角いきょう体の新形と2つの形態があり、写真は新形である。

**特徴**

送受話器は、デルビル壁掛形と同性能。甲号は送受話器を同一把手で連結してあるが、乙号は壁掛形と同様別々となっている。

いずれも発電機、誘導線輪及び磁石電鈴を同一の箱に納め、性能は同じである。

**\*同系機種**

デルビル磁石式乙号卓上電話機

**ソリッドバック磁石式  
壁掛電話機**

1899


**1899年(明治32年)**

明治32年2月、東京-大阪間の長距離電話回線の完成により、長距離通話用としてソリッドバック電話機が採用された。当時、長距離通話の利用者は、年額6円の付加使用料を支払い、長距離通話加入者となる必要があった。

開通当初、東京・大阪とも各178加入者でスタート。通話は近距離に劣らず良好であった。その後、神戸、京都等サービス対地も広がり、利用者も増大した。

**特徴**

ソリッドバック送話器は、炭素粒の前後に振動板を配して感度の上昇と雑音の排除を効果的にしている。

また、電池は、フーラー電池を使って電圧を上げる等して電流を大きくしたので、長距離用に適した。

**グースネック共電式  
壁掛電話機**

1903


**1903年(明治36年)**

明治36年5月、初の英国製共電式交換機が京都局に導入され、同時に付随してグースネック共電式電話機が購入・採用された。

共電式は、利用者が受話器をとるだけで局を呼び出せるという便利な点のほか、電源を局内に集中してあるため、電話機障害が少なく、保守・交換作業が能率化され、また、発電機、電池が不要のため電話機の小型化・簡素化が図れる等の利点を持っている。反面、当初、湿気等が原因で起こる線路の絶縁低下による疑似信号の発生が問題とされた。このため、湿気の少ない京都局が最初の共電式局となった。

**特徴**

送話器にはソリッドバック送話器を、受話器には2本の棒状永久磁石を結合した双極形のものを使用した。

腕金の先端に送話器をつけた格好が“ガチョウの首”に似ているところから“グースネック”と呼ばれた。

**2号共電式  
壁掛電話機**

1909


**1909年(明治42年)**

京都に続いて明治42年、東京、大阪、名古屋の一部で共電式が採用された。この頃には共電式の欠点であった線路の絶縁低下の問題はエナメル線等の開発によって解決され、以後、大正期を通じ次々と共電式に改められていった。2号共電式電話機は、本格的な共電式時代を迎え国産化した最初の共電式電話機である。

**特徴**

送話器にはソリッドバック送話器を使用、受話器は有極電磁石を使った回路が採用されているほか、形態が簡素なものとなった。

**\*同系機種**

2号共電式卓上電話機

|             |      | 1920年  | 1924年               | 1942年                              | 1944年                      | 1946年                               |
|-------------|------|--|---------------------|------------------------------------|----------------------------|-------------------------------------|
| <b>電話料金</b> | 市内通話 | 東京年額基本料 45円<br>東京、横浜、名古屋、大阪、京都、神戸の六大都市で市内通話料が度数制となる<br>度数料 2銭(市内通話1度毎) | 度数料 3銭<br>(市内通話1度毎) | 東京年額基本料 60円<br>度数料 5銭<br>(市内通話1度毎) | 度数料<br>東京 10銭<br>(市内通話1度毎) | 東京月額基本料 24円<br>度数料 20銭<br>(市内通話1度毎) |
|             | 市外   |  |                     |                                    | 東京～大阪間3分毎に2円               | 東京～大阪間3分毎に7円50銭                     |

## 2号自動式卓上電話機

1927



## 1927年(昭和2年)

関東大震災以後の復旧を機会に、これまで限界にあった手動交換方式を自動交換方式の導入によって解決することになった。

大正15年1月、初めて東京にA形、横浜にH形の自動交換局が設けられた。

最初の自動式電話機は、それぞれの交換機に付随したものであり、その後の増加分は2号共電式電話機に1号ダイヤルを組み合わせたものであったが、ダイヤルすると受話器に雑音が入る欠点があった。

昭和2年、これを改良した2号ダイヤルを取り付けたA形・H形共用の2号自動式電話機が採用された。

## 特徴

自動式電話は電圧が48V(H形は60V)と高く、当時、電話機の選定には、かなりの論議を呼んだが、電話機製造の経済化、機種の一統化等の面のできるだけ2号共電式と共通のものを用いることとした。したがって、形態は2号共電式にダイヤルをつけた形となっている。

## \*同系機種

2号自動式壁掛電話機

## 3号自動式卓上電話機

1933



## 1933年(昭和8年)

昭和8年、送・受話器を連結した斬新なスタイルの3号電話機が誕生、以降いろいろな電話機のスタイルの原形となった。

以来、わが国の代表的な標準電話機として約30年にわたって活躍した。

戦後、電話の復旧に標準電話機の生産が間に合わず、応急処置として、メーカーの私設交換機用在庫の中から標準機と同等の性能のものを購入して使用した。これらに“富士形”“イ-661”等があった。

## 特徴

きょう体にベークライトが初めて使用され、送話器には、炭素粉を使ったソリッドバック形を用い、炭素粉の凝固、低感度を解決するため、防じん・防湿措置のほか、側音防止回路を初めて採用した。

## \*同系機種

3号自動式壁掛電話機  
3号自動式富士形電話機  
3号共電式卓上・壁掛電話機  
3号磁石式卓上・壁掛電話機

## 4号自動式卓上電話機

1950



## 1950年(昭和25年)

戦後、従来の3号電話機の性能をさらに上回る新形電話機の研究開発が進められ、昭和25年、性能、デザインともに世界の水準をしのぐ電話機として、4号自動式電話機が誕生した。

“ハイ・ファイ電話機”といわれるほど感度が高く、そのためケーブルの細芯化にも大きな効果をあげた。

同年、東京・丸の内局等6局で商用試験が行われ27年から本格的な4号化が進められた。

## 特徴

送・受話器内の振動板を従来の軟鉄振動板から軽量のジュラルミン製を用いて共振周波数を高くし感度をあげている。ケーブルは、従来の最小線径0.5ミリ(1,800対)を0.4ミリ(2,400対)に細芯化することができ、ケーブルの経済化・多対化が可能となった。

## \*同系機種

4号自動式壁掛電話機  
4号共電式卓上・壁掛電話機

## 23号自動式壁掛電話機

1953



## 1953年(昭和28年)

昭和25年頃は自動改式当初の2号自動式壁掛電話機が旧形のまま20万台弱使われていた。

しかし、この電話機は、伝送特性が悪く、また、部品材料も旧形のままであったため、昭和28年7月、3号自動式電話機と同一の伝送特性及び品質に改善し、23号自動式電話機として使われた。昭和34年頃から順次淘汰された。

## 特徴

改善部品は、送話器、誘導線輪、端子板及び回路等である。

## \*同系機種

23号共電式壁掛電話機

## 電話料金

|      | 1947年  | 1948年  | 1951年  | 1953年  | 1962年  |
|------|--|--|--|--|--|
| 市内通話 | 東京月額基本料<br>住宅用 75円<br>事務用 120円<br>度数料 50銭<br>(市内通話1度毎) | 東京月額基本料<br>住宅用 300円<br>事務用 480円<br>度数料 2円<br>(市内通話1度毎) | 東京月額基本料<br>住宅用 380円<br>事務用 540円<br>度数料 5円<br>(市内通話1度毎) | 東京月額基本料<br>住宅用 700円<br>事務用 1,000円<br>度数料 7円<br>(市内通話1度毎) | 市外通話料に距離別時間差法導入<br>東京月額基本料<br>住宅用 700円<br>事務用 1,000円 |
| 市外   | 東京～大阪間<br>3分毎に38円                                      | 東京～大阪間<br>3分毎に152円                                     | 市外通話は即時扱いと<br>待時扱いを料金区別                                |  | 東京～大阪間<br>4秒7円                                       |

600形自動式  
卓上電話機

1962



## プッシュホン

1969

留守番電話機  
レポンスⅢ形

1985



## クローバーホン

1987



## 1962年(昭和37年)

昭和37年3月、東京都下昭島局での商用試験を皮切りに登場した600形電話機は、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれている。その後、全国的な商用試験を経て、昭和38年から全面的な600形電話機の導入が図られ、昭和46年からは、ホワイト、グレー、グリーン3色によるカラー化も始められた。ここに通話機能においてほとんど申し分のない電話機の出現を見ることができた。

## 特徴

4号電話機の3倍以上も感度が高く、これによりケーブルの細芯化は、さらに0.32ミリ(3,600対)まで可能となった。また、初のプリント配線の導入により信頼性、量産性を増している。デザイン面では送受話器が自然に正しい位置に収まるようにし、また、ダイヤル面もボディに埋め込む等細かい配慮がなされている。

## \*同系機種

600形自動式壁掛電話機

## 1969年(昭和44年)

コンピュータの開発は、データ通信という新しい通信分野を生み出した。こうしたコンピュータと連結できる電話機として、通話以外の機能を持つ新しい電話機“プッシュホン”が誕生した。短縮ダイヤル等従来の電話機のイメージを変える機能を持っている。また、昭和47年9月からは、従来のグレーに、ホワイト、グリーン、レッドを加えて4色となった。

## 特徴

ダイヤリングは、数字ボタンを押すだけでよく、これによって特定の周波数の音声信号を発信し、これが交換機を作動させる。ダイヤル数字のほか、2つの機能ボタンがあり、これは短縮ダイヤル等のキー・ボタンの役を果たす。

## \*同系機種

プッシュ式ホームテレホン  
プッシュ式ビジネスホン

## 1985年(昭和60年)

昭和60年4月から本電話機が自由化され、自分の好みの電話機を選べるようになり、さまざまな形や機能を持った電話機が登場した。

## 特徴

「レポンス」は、留守番電話機能を備えた電話機で、応答専用機、マイクロカセットテープ1本の応答録音機、標準カセットテープ2本を使用する応答録音機の3タイプがあった。

## 1987年(昭和62年)

昭和58年12月から単体電話機のメイン商品としてプッシュホンハウディシリーズを提供してきたが、デザイン重視・OPD電話機及びスイッチャブル電話機が主流である単体電話機市場に対応するため、プッシュホンハウディシリーズの後継機種として、ハウディ・セレクトとともにクローバーホンを5月から発売した。

## 特徴

シンプル&リーズナブルなデザインに加え、低価格であるため、単体電話機の中でも特に人気がある。タイプには、クローバーホンyou(ヨコ形)とクローバーホンme(タテ形)があり、色はクリアホワイトほか6色と豊富である。機能面では、(1)DP/PBスイッチャブル(2)再ダイヤル(3)着信音量切替(4)保留音送出(ノクターン/メヌエット)と簡易な機能で経済化を図り、販売価格は12,800円と手ごろな価格である。

## 電話料金

|      | 1969年  | 1972年                                   | 1976年  | 1977年                               | 1983年             | 1985年   |
|------|--|---|--|-------------------------------------|-------------------|---|
| 市内通話 | 級局を5段階とする<br>東京月額基本料<br>住宅用 900円<br>事務用 1,300円 | 広域時分制の導入<br>市内通話の料金度数制を<br>改め時間制(3分)を採用 | 東京月額基本料<br>住宅用 1,350円<br>事務用 1,950円<br>度数料 10円 | 東京月額基本料<br>住宅用 1,800円<br>事務用 2,600円 |                   | 端末機器の開放<br>東京の回線使用料<br>住宅用 1,550円<br>事務用 2,350円 |
| 市外   |  |   | 東京～大阪間<br>4秒10円                                |                                     | 東京～大阪間<br>4.5秒10円 |   |

民営化以降については、本文をご参照ください。

## ハウディ・コードレスホン パッセ

# 1988



### 1988年(昭和63年)

昭和55年5月、初めて登場したコードレスホンは、普通の電話機が持ち運べるという形のものだった。

レンタル商品としてのみ提供してきたコードレスホンは、昭和62年10月に電波法改正により自由化されたことからお買い上げいただくことができる商品が登場した。

#### 特徴

「ハウディ・コードレスホンパッセ」は、小電力タイプのコードレスホンで、通話可能範囲は接続装置から半径100メートル程度(見通し距離)でフル充電しておけば、連続4時間程度通話可能。

## デジタルコードレスホン ピエットS100-Sセット

# 1995



### 1995年(平成7年)

平成7年7月、デジタルコードレスホンの子機を屋外に持ち出せるPHS(パーソナルハンディホンシステム)サービス開始。

#### 特徴

「デジタルコードレスホンピエットS100-Sセット」は、PHSサービスに対応できるほか、同一の接続装置に登録した2台を持ち出しトランシーバのように使用することも可能。「ピエット」とは、“Personally I Enjoy Talking”の頭文字をとって「Piet」とし、「街角でおしゃれな電話機を持ちながら、自由に会話を楽しむ」という意味。また、英語(スコットランド地方)の俗語では、鳥類の“カササギ”から転じて「おしゃべり」という意味もある。

## NTT FAXT-219CL (でんえもん219CL)

# 1996



### 1996年(平成8年)

平成3年から「でんえもん」の愛称で提供してきたホームファクスは、留守番電話機能やコードレス子機を付加しながら普及していった。

#### 特徴

「でんえもん219CL」は、留守番電話機能とコードレス子機を搭載したホームファクス。コードレス子機個別にダイヤルインを設定できる「子機別ダイヤルイン機能」やマイクロカセットを使用しないIC録音方式による「デジタル留守録」機能を搭載。

## ハウディ・デジタル コードレスホンDCP-4100

# 1997



### 1997年(平成9年)

平成10年2月のナンバー・ディスプレイ提供開始に先駆け、平成9年11月、ナンバー・ディスプレイ対応デジタルコードレスホン登場。

#### 特徴

「ハウディ・デジタルコードレスホンDCP-4100」は、親機、子機のディスプレイに、かけてきた方の電話番号が表示され、あらかじめ登録した方からの電話は、名称も表示し、しかも、着信音も変えられる。また、かかってきた方の電話番号を5件まで蓄積できる等、ナンバー・ディスプレイをより便利に使うためのデジタルコードレスホン。なお、デジタルコードレスホンは、アナログ方式に比べ、通話品質や盗聴に対する防止機能も格段に向上した商品。

## マルチメディアホン テレッセ

# 1998



**1998年(平成10年)**  
平成10年11月、誰にでも簡単にインターネットが利用可能な大型ディスプレイを搭載したマルチメディアホン登場。

### 特徴

「マルチメディアホン テレッセ」はディスプレイのアイコンメニューをタッチすることでホームページへのアクセスや電子メールの送受信、留守番録音、ファクシミリ送受信等が簡単に操作可能なマルチメディアホン。低価格なISDN端末であり、インターネットを行いながら電話でお話ができたり、ホームページからの電話番号検索等多様なサービスで女性層から好評をえている。

## i・トレンビーシリーズ

# 1999



ワイヤレスパソコンアダプター

**1999年(平成11年)**  
平成11年5月、ワイヤレスでのインターネットが利用可能なTA/DSU内蔵のISDN専用コードレスホンが登場。また、同年12月にホームファクスタイプも登場。

### 特徴

「i・トレンビーシリーズ」は、ワイヤレスパソコンアダプターを接続することにより、ワイヤレスによる最大64kbpsのインターネット通信を可能とした商品。ISDN回線専用なので、インターネット接続中も電話でお話ができたり、「i・ナンバー」サービスを利用した電話番号の鳴り分けが可能。また、TA/DSU内蔵で、最小限の設置スペースで利用できます。

## プチウェブ(PI-2000)

# 2000



**2000年(平成12年)**  
平成12年5月、簡単設定・簡単操作でインターネットが利用可能なインターネット専用機が登場。

### 特徴

「プチウェブ」は、インターネット初心者がインターネットを手軽に利用できるように、面倒な設定・操作を簡素化し、購入した日からインターネットへのアクセスを可能とした商品。また、専用のポータルサイトを開設しており、生活に役立つ情報や便利なリンク集、掲示板等充実した情報を提供。

## Lモード対応電話機

# 2001



でんえもん750LD

**2001年(平成13年)**  
平成13年6月29日よりサービス開始の「Lモード」に先駆けて、平成13年5月15日からLモード対応ホームファックス及び、デジタルコードレスホン登場。

### 特徴

「Lモード」に契約することによりコンテンツ提供者のサイト閲覧、Eメールの送受信等のインターネットサービスが「簡単・便利・安価」で利用できる商品。着信メロディのダウンロードやお気に入りのホームページの画像を本商品の大型ディスプレイの待ち受け画面に設定することも可能で、より快適なコミュニケーション端末として提供しています。

NTTFAX P-760LC  
(でんえもん760LC)

2003



2003年(平成15年)

平成15年7月15日よりサービス開始の「写真Lメール」に対応したホームファクスが平成15年8月1日から登場。

#### 特徴

「でんえもん760LC」は、Lモードを契約していただくことにより利用できる「写真Lメール」の送受信が可能な商品。デジタルカメラ機能付きカラー液晶ディスプレイをファクスから取り外して写真を撮ることができるほか、撮った写真をメールに添付して送れる等、Lモードをより楽しくご利用いただける端末として提供しています。

フレッツフォン VP1000

2004



2004年(平成16年)

ブロードバンド回線の急速な普及を背景に、インターネットの利用のみならず、映像コミュニケーションや情報の入手をリアルタイムかつ簡単な操作で利用したいというニーズの高まりに応えたIPテレビ電話機。

#### 特徴

「フレッツフォン VP1000」は、フレッツ・光プレミアム、Bフレッツ及びフレッツ・ADSLに対応し、フレッツ・光プレミアムの標準機能であるテレビ電話機能等を利用することにより、パソコンを利用することなく簡単な操作で、高品質なテレビ電話をご利用いただける端末です。

ひかりパーソナルフォン  
WI-100HC

2006



2006年(平成18年)

「ひかり電話」の本格展開に伴って提供を開始した付加サービスと組み合わせることで、より一層便利に「ひかり電話」をご利用いただける専用無線IP電話機。

#### 特徴

「ひかりパーソナルフォン WI-100HC」は、「ひかり電話」の付加サービス「追加番号」、「複数チャネル」を組み合わせることで、ご家庭等で個人毎に電話番号を使い分けたり、電話2回線分を同時にご利用いただけるコードレスタイプの端末です。

フレッツフォン VP100

2007



2007年(平成19年)

本格的なIP時代に先駆け、ご家族で利用する映像コミュニケーションを、従来の電話機と変わらない使い慣れたデザインで手軽に操作できるひかり電話対応テレビ電話。

#### 特徴

「フレッツフォン VP100」は、フレッツ・光プレミアム、Bフレッツ、フレッツ・ADSLに対応し、フレッツ・光プレミアムの標準機能「テレビ電話機能」による高品質なテレビ電話をご利用いただけます。またひかり電話の「テレビ電話」サービスを利用することにより、FOMA®端末(NTTドコモ)との映像コミュニケーションもご利用いただける端末です。ハンドセットや大きなハードボタンにより、普段から慣れ親しんでいる電話機と同様にご利用いただけるテレビ電話です。

## ひかりクリアフォン HQ-100

# 2009



## ひかりフレッツフォン VP3000

# 2011



### 2009年(平成21年)

NGNサービス「フレッツ 光ネクスト」において「ひかり電話」をご利用のお客様向けの高音質電話機が平成21年2月18日から登場。

### 特徴

本商品は、高音質電話対応機器との間で、広帯域(100Hz～7kHz)の周波数を利用した音声通話が可能です。従来の電話機に比べ、高い音や低い音も再生できるようになり、話し声も聞き取りやすくなっています。

また、通話先が従来の電話機や「Bフレッツ」及び「フレッツ・光プレミアム」を利用した「ひかり電話」、携帯電話の場合でも、擬似広帯域通話機能により、従来の通話に比べ、高音の帯域を広げた300Hz～約6kHzの擬似広帯域音声で通話できるため、クリアな音声で通話ができます。

### 2011年(平成23年)

「フレッツ光」の「ひかり電話サービス」をご利用のお客様向けに、タッチパネルによる簡単な操作かつ高音質・高品質なテレビ電話が利用可能な「光LINK」シリーズの「ひかりフレッツフォンVP3000」が平成23年2月16日から登場。

### 特徴

「2010年度グッドデザイン賞」を受賞した「ひかりフレッツフォンVP3000」は、「フレッツ 光ネクスト」、「フレッツ・光プレミアム」または「Bフレッツ」のブロードバンド回線を利用し、タッチパネル操作等で簡単に「ひかり電話」を利用した「テレビ電話」や「デジタルフォトフレーム」等が利用できるIPテレビ電話端末です。

また、本商品をカスタマイズすることで、IRUエリアの自治体様が配信する情報のIP告知端末としての使用等、様々な用途でご活用いただけます。